



う
た

2026.
September

no. 343

Utasona
ら

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄 「夕」	12
一首評 「そらよみ」	14
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	16
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	18
次回予告・編集後記	19



織部ゆい	@yui_oribe	須藤純貴	@junki_poem	水上歌眠	@kamin_plz
柿崎薫		砂山ふうり		水野英明	@8hPx00xxUX56195
歌島孟	@Sinn1990	多香子		南の島	@_nkmmn
片羽雲雀	@anju92091554	tan k a l i f e	@tankalife31	みはうひたき	@osoyuu
涸れ井戸	@kaionji0e	千原うはき	@kohagi_tw	水也	@m_ya-o
キキキキウ	@meinalltag_	低体温	@teitaiando	宮嶋つぐく	@miyazima_izq
北乃銀猫	@silbernekatz_	このもてかし	@tonomozukasa	村田一広	@mucc12022
北谷雪	@kitaya_misomiso	中村成志	@nakam8	森内詩紋	@Nj40Ev95qlcRpu
橋高なつめ	@cocomutkiko	七澤銀河	@ginga_Nanasawa	ルオ	@ruo129
キム・ジュンウ	@junwookim0910	埜中なの	@nanoTANKA	若山かん菜	
くろだたけし	@tkuro2016	畑 依裕			
高野蒔	@four70percent	はづきもん	@moshimoshi_mori		
澁谷幸司	@kainohi1	廣珍堂	@hirochin_dos		
西鎮	@xi_zhen_jvJT	福山桃歌	@momoka_fukuyama		
白川楼瑠	@ouru_shirakawa	古井 朔	@saku_furui		
寿司村マイク	@XHKsBNR4wV1wJ8M	M a s a r u o	@mawa_ru_		
麻倉ゆえ	@AsakuraYue				
域	@ikisuhaku				
井倉りつ	@uta_lit2				
宇祖田都子	@Shinnsyutu2020				
泳二	@Ejshimada				
小野小乃々	@aurora_konono				

計48名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそら

Ultima Thule

井倉りつ

病的な反芻思考 執着の終着駅って上着いるかな？
「言いたい」と思ってたことなにもかも「言いたかった」になっちゃって、夏
泡風呂の泡は案外冷たくてそれでひとりでなにしてたんだろ
諦めるつもりでずっと寝てるのに夢に出てくるのやめてください
ルサンチマン 置き去りにされた方の負け 弱い涙のほうが透明
ぜんまいが壊れて鳴らないオルゴール わたしが壊したんじゃないもん
つきたての嘘 できたての傷 いつか愛になれたらよかったのにな
途轍でも途方でもそこに「ない」ことに変わりはなくとにかく遠い

屋上猿部34「空なら飛べるはず」

宇祖田都子

不定期に開放される屋上の飛び込み台は白く聳える
順番を待つ行列は一階の非常階段前まで続く
先頭が飛び込むたびに階段をみな一斉に一段上がる
屋上の入口前に会議用テーブルがある「受付」らしい
目の前の飛び込み台は逆光で飛び込む人が隠されている
行列はテントの中を通過するみんな裸足でびしょ濡れになる
飛び込み台を上る梯子は冷たくてぬるぬるするので気を付けて
屋上の開放日には全員が「空なら飛べるはず」だと思う

故郷 (C/W 泪雨)

泳二

雨の日はやっぱりだめだ紫陽花の公園で歌う中森明菜
走るのは速かった帰宅部だった たぶん泣いたことはなかった
やみそうにない街の隅カラオケとサラ金の看板は似ている
褒められることには慣れたありがとうございましたも上手に言える
人生という程じゃないものばかり抱えてなんだか重いデンモク
まつすぐな人をまつすぐ映しても泣いたりしない昼間のテレビ
白球を追う背の白さ 故郷を故郷と呼ぶことに慣れない
まだそこにあるんだろうな捨てられたわけでもないし捨ててもいい

大津絵になるワタシ

歌島孟

鬼なれる我が身ばかりか 打つ鉦に摂取不捨とぞ空に響ける
大空へ鷹を見上げて手を上ぐるをのこの髪へ風ふきわたる
瓢箪を空へ放下し笑いあふ猿と鯉を月は照らして
娘子の花とし笑まふ顔ばせへ影をつくりて揺れる藤浪
荒波に浮かぶ太鼓のぶかぶかと雷様を連れて馳せくる
神さへも突ける覚悟でもつ槍の穂先はひとり天に間近し
薙刀や太刀にも負けぬ忠を最期に残し立てる弁慶
袖をひく犬の道などふり捨てて君の声する恋の闇路を

八画ぶんの距離

キキキキキウ

歩道には昨日の雨が残ってる 連れて帰れない金魚の赤
知性など君の前では役立たず 君が好きだよ 大好きなんだよ
定期券切れたままでも持っているカンパネルラと旅する妄想
和解など求めてないし出来ないし反省もないし君もいないし
命名が出来ないものを引き出しに 君と呼ばたらその時捨てるね
対岸に灯りがひとつ またひとつ 充電しては星を使つて
昔話みたいに僕を語る日が君には来ないことだけ祈る
明日着るスカートだけを決められず 君に聞きたい「どれで会いたい？」

思い出マニア

氷乃銀猫

ねむれないのは風のせい揺れているのも風のせい思い出のせい
生きてゆくために記憶の整理する思い出つて無限に残せぬ
断捨離で見つけた手紙なつかしさ抑えそのままシュレッターする
思い出にならないように一枚の写真すらない そんな思い出
美化すると圧縮される人はみな浸してくれる思い出を乞う
あふれたら拾えないから思い出のしずくはそつと砂に滴る
思い出すだけで高揚できること宝箱にはそれだけ仕舞う
欠片だけでも拾おうか思い出はいらないけれどお守りはいる

5815141

片羽雲雀

ずいぶんと切れ味のいい8月に切り刻まれてまた繭のなか
つよがりも炭酸水で薄めれば涙とともに飲み干せるはず
とまどいの色にもタバスコ黒胡椒オリブオイル残さず食べて
そらす背をなぞった指に絡みつく影消すように口に含んで
ばかみたい閉ざせば無理にこじ開けてたしかめる舌ひろがる虚ろ
にあわないう服を捨てられない日々に溺れてるのに気づかないふり
いさぎよく降伏をして跨がれば肩のむこうで泳ぐまなざし
てきとうな口約束の頭文字あつめて贈るプロポーズかな？

短歌草野球

涸れ井戸

相方の急病の報みなかみの歌合のため代打をさがす
ミク2で観覧に行く狼を見て助っ人をしてくれと乞う
狼は無理な願いをきいてくれいちかばちかで勝利を目指す
群馬県みなかみ町で初めての短歌草野球プレイボール
リリーフのりぼん歌会の相方と初めましての挨拶をする
狼の短歌の読みは精確で足らぬのは舞台度胸だった
みなかみは緑と水と花の町ハイエースにて温泉宿へ
MCの選者賞にてCDと赤松材の賞状も得る

松濤美術館 SOMPO 美術館 父と

北谷雪

「開かない車両」はもう無く降りられない父の記憶の神泉駅に
回廊から見下ろす噴水松濤の鳥ならひそやかなデートに選ぶ
孤高だが孤独ではないと評された画家の描いた月 あたたかい
絵の中に薫る蠟燭、紙煙草 風化してゆく炎のことを
展示室のベンチに浅く腰掛ける父は幾分薄ぺらになり
山手線のめまぐるしさに読みたい本、行きたい場所の話は途中
Googleを閉じる 新宿西口を迷いなく行く背中を追つて
大きいほど良いねと囁きしばらくは桜の素描の前で並んだ

虹を待つ

橘高なつめ

ばらばらの真珠ちぎれた思い出を繋ぎ合わせる不器用なゆび
あの人に電話しながら飲んでるラムネの音が聴こえるかしら
カーテンにじやれて窓から忍び込む「子猫のワルツ」とぎれとぎれの
飛び去ったカモメいつしか忘れゆく繋ぐ手のひら熱かったこと
本当にあるものだけを信じたい虹も蛍もすぐに消えるし
もう君とキスするのは最後だと気付いてしまうキスをしながら
水をやり過ぎてもうじき枯れるけど虹を待ってる傘もささずに
ひび割れた眼鏡がはじく雨粒のひとつひとつにあなたは暮らす

いつからか帰路という逃れられなさがぼくのしっぽの代わりになった
毎日の同じ時間に鳴る鐘に従ってきたからだのきしみ
限られた視野しかなくて背中にもときどき傷がついては治る
つなげればコードはすぐにかからまって遠くへ行こうともう思わない
なんらかの限界がきて酷暑日の扇風機から吹く熱い風
手遅れになったことから思い出に庭の木は手の届く高さに
今ならばラジオ体操も馬鹿にせず背のびくらいはしてみたくなる
見せかけの空の青さを受けいれて無罪ではないとしても無害

降り注ぐ

高野蒔

雨ふりの窓辺は緑 たましいを放し飼いしているから見える
ひたひたに仏蘭西の詩を入れてある硝子の箱へ眼など吸われて
金槌も飾られている本棚に図面の青い直線ねむる
たゆみなく月の光は降り注ぐ書斎に四つきの耳へと
靴下でゆつくりと古い木に触れる縁側という境界線の
庭先から家を見上げる横顔を過去か未来に見ていたような
増えてゆく わたしの力で開けられる蓋は あなたに見守られると
夕ぐれにのむ花のお茶 あなたから貰う言葉を数えきれない

夏の海光みちたり波白く悲しみ知らぬ日々はありけり
渚辺に海風かすか立ち初めてわづかに揺るる夏の静けさ
潮騒に遠のく声を聞きながら胸のさざ波止まずありけり
海鳥の高く翔けゆく空見れば自由の影の遠くなりゆく
蜃気楼揺らぐ渚に風立てば戯れごとくも罪となりけり
白き道夏日の果てに消えゆきて潮の匂ひの残るばかりぞ
波寄せて足跡消せど胸底の悔いのひとすぢ消えざりにけり
夏果てて波音のみの渚にはセシルひとりぞ悲しみありける

岬まで

西鎮

一応は誘ったみたいなニュアンスが行間にみえ、断っておく
遠花火 言い訳っぽいさよならの波紋がさつき胸にとどいた
八月の集合写真の右端の兄にずいぶん父の面影
送り火の煙まつすぐのびてゆく故郷の空の匂いは秋の
すこしずつ道は等高線を越えカラジオからさざ波の来る
百日紅ゆたかに濡れて八月のノイズみたいな夕立ちを浴び
絹どうふ箸で崩せば諦念のように流れる醤油ひとすじ
岬まできみと歩けばこんなにも遠い水平線だときづく

S (UNAYAMA) F 昴

砂山ふうり

みそらーめんゆがいてほぐしすることそれも生まれたりゆうのひとつ
十五夜の月の光にリモコンを向けてスイッチ入れた父さん
絶対に有り得なかった負け方をした義元を夜長に想う
畿内説九州説にその他説邪馬台国はこのままがいい
キャッシュレス化になってゆくわたしたち貝殻ひとつから始まって
くすぐすがじわりじわりとよじ登り仏頂面に雪崩を起こす
人生はオールのように翻り水面無数にXの光
それぞれに微量のデジャヴが含まれて花鳥風月春夏秋冬

食欲の秋

多香子

秋の日は二人で栗を剥きながらなんでもない事笑い合ってる
好きなだけ食べるあなたの豪快さ、食料危機は気にかかるけど
しめじより松茸よりも舞茸が好きな二人の炊き込みご飯
変わり身の早い台風迷走し明日あなたは家に帰れぬ
痩せた豚太ったソクヲテスにもなれなくて私は私、小太りなまま
お隣に毎日ごはんを食べに行く家のシマ子は8キロもある
秋はまだ台風銀座の様相でバイトの帰りに星も見えない
秋深くダイエットなど気にせずに栗のパフェでストレス解消

let go

千原こはぎ

目の奥でまたひとつ星が死んでいる やりたいことはできないことだ
はじめてのスーパードに行くそれなりにこの町の血管にも慣れて
(いつか会うとき食べる用) 見たことないポテチをひとつ日常に足す
内側に深く燃えつづけるひとがまだいて 真夏 乾ききれない
重すぎるまぶたの中からだこえこころ 手を伸ばしてもこわがらないで
また顔を見せてくれない夢を見た 腹が立つほどあかるい朝だ
ダイニングテーブルも買い替えたいな 景色ごと手放してしまいたい
さよならの予行演習 おもいでを重ね重ねたピアスを仕舞う

鏡の外

低体温℃

友達がシル帳とかメイクとか話すあいだに私は笑う
制服のスカートの丈あげてみてちよつと可愛いくるりとまわる
可愛いを自分のためと思ってた君が「いいね」と言ったあの日まで
ネットにはドールみたいな可愛い子真似してみても鏡はわたし
可愛いを借り物みたいに着ていたならサイズ違いで息苦しいな
好きな服好きなメイクを選んだら鏡の中で私が笑う
前髪が崩れていても笑えた日私は少し大人になった
好きな色リップにのせて歩き出す鏡の外も私は私

八月終わる

中村成志

階段が疲れたところに踊り場のあるありがたさ片膝をつく
嫌いなのは「夏」じゃなくって「暑」だった白百日紅泡立ち止まず
突発の豪雨に騒ぎ発つすめ水を命は一番好きだ
怒る力を溜めるのにまず要るちから家に帰ればビールがあるよ
夕立を理由にしよう叩かれりや痛いし叩くの面倒くさいし
熱湯を一瞬ぐり泥夏からオクラはオクラの色とりもどす
大陸産の麦酒の缶に身を委ね身の内に追うみどりの響き
蟬声の疲れも増して桜葉の散り始めては八月終わる

不条理な風

七澤銀河

早朝の呼び出し音が連れて来る僕を知らない誰かの暮らし
フエイントを時折掛けて台風は星の休暇を削って進む
黙々と氷砂糖を割る音が暗示していた僕らの終わり
風鈴の音の乾きですぐ傍に次の季節が在ることを知る
ちつぽけな小腹に隠した言い訳にバナナケーキを強かに積む
定刻にカレーが並ぶ食卓に誰か一人が欠けて行く夜
噴水で誓った夢は水のように来る人を拒まずに微笑む
長すぎる君の電話もこの夏も終わりを詰んだ不条理な風

クズ石の独白

はつきもに

いつだってないに目がいく生きづらさ どうせあたしは空の落伍者
Color そう、光る個性もないでいて才もセンスも持ち合わせずに
Clarity 転じて落ちて傷だらけ 不純物^{インクレジュー}だって愛して
Cut ねえ とうの昔に飽いていた 磨けば光る。なんてたわごと
Carat と 重さがモノを言うようでだれもクズ石なんか要らない
原石かさえも知らない自分をさ 磨けて それ、どんな無理筋
本当は自分を好きでいたくって “あたし” の意思で輝きたい、よ
ほら行こう 他人軸とか蹴飛ばして 照らすひかりを頼りに未来^{あす}へ

夏休みの短歌日記

廣珍堂

中元で貰ひし素麺を食べ続け我が家は水と白の渦巻
級友といふ監視から放たるも二学期といふ不安に追はる
サウナから整う場所に流れ着く京都の古いビアガーデンへ
研究は電脳ばかりになっていて真夏の恋に加圧試験す
女生徒が写ルンですよで撮っている写真ではない「きやはは」の記録
夏休み教室改装むき出しのコンクリートに児童の匂ひ
宿題を忘れましたは許されて工事の遅れは禁じる社会
毎日が夏休みなる齡なれど朝の目覚めはいよいよ早し

鬼の名前

福山桃歌

それはまだ眠りの前の物語あなたの名前をわたしは呼ばない
偶然と呼ぶにはすこし甘すぎて呑み込んでいく夜の残像
わかりたい 花が咲いたらふくらんでそのままわれてしまわないかとか
約束を交わしてあらぬ方向に曲がった道が均されている
ふれられてふれて溶けだす輪郭の撫でれば淡い血の色だった
手のひらに傷がいくつもあつたこと爪を切るのも忘れていたよ
戻れない ここから先は地獄だと知っているのに落ちていくのは
祈るほど暴かれていく罪のごとわたしの名前をあなたは呼ばない

八月に帰る場所

水上歌眠

色鉛筆の専門店あり鉄檻のようにシャッター開かぬ通り
帰り道は八月に帰る道となり空き地に『かんてい局』の看板
うつくしいだけで話の進まない取り切れなかった蜂の巣のこと
ビニールのテーブルクロスに挟まれて計報の切り抜きの水嵩は
それぞれにそれぞれがもういないこと戸惑うように煙たなびく
自転車のからから鳴ってどの夏もこの夏にいる、気配でわかる
誰もいつか帰れるしくみ 知らずともひかりの海岸線をなぞって
君のことわからなかった。認めたらやつと大人になれた気がした

溶けちゃったアイスクリーム、溶けない夏

Mawaru.

熱射病みたいな顔して聞いたLINE この夏を君で満たしていくの
トドメ刺す夏の暑さが恋しくて アイスクリームひと口あげる
クーラーの効きすぎた部屋 愛してる クラットしたのは君のせいだ
ねえ夏を終わりにしないで もっと奥底深くまで味わい尽くして
溶けちゃうよ 君への愛がドロドロ口になったら掬い上げてね お願い
夏なんか、夏なんて、って言い訳で後回しにした夏の幻
終わりとか見たくないから 終わらせない この夏ももっともつと汚して
溶けちゃったアイスクリームとバグってる脳みそ、溶けない君への愛だ

取り戻す

南の島

昼寝するカーテンは揺れていてほしい たましいは一枚の布になる
茹でるといふ過程がいいね冷凍をチンするだけじゃムラになるから
アールグレイブーケティーラテ体毛の話をしているマダムのと看
言わないと伝わらない この封筒は再生紙を使用しています
我々を試すみたいにワッシャーが散らばっている聖人も見る
熊本市電A系統一人ずつ降りながら言う「じゃあまた明日」
覚えてる？ 幼馴染のスピーチに何だったつけと言える花嫁
これからも楽しいことはできるじゃん 八月のテーマは「取り戻す」

ヒプナゴジア

みはうひたき

スパイスのたぶん胡椒がはさまったままの奥歯で夢をみていた
茹でたてのスナップえんどう真緑のひかりさえぎる白 マヨネーズ
レクチャーをきいていたなら飛べたかも空を見ながらヤクルトを飲む
あんなにも速く走れて肉食の馬がいたならこわいだろうね
百均の偽物バービー人形を大事にした首がもげて
寝てましたなんて言えないどこまでが夢かわからず教官の爪
送信をタップ あなたは夕暮れて今があの日のような気がする
やり方を教えてくれず僕なりにはじめて食べた蟹を壊して

ジュヴナイル

水也

だいたい気づいたときには遅すぎる崩壊はもうはじまっている
手をとって駆け抜けてゆく瓦礫とか君の匂いの染みついた午後
何気ない日常でいいときどきは目玉焼きのつく朝食がいい
明後日の約束をする薔薇園で一緒にお茶を飲んでいたいね
学校に警報が鳴るいたみとはかなしみのない青空を言う
木漏れ日をよいものだとしてつなぐ手の震える脆さ絶唱のもと
懐かしき燈の空いつまでも笑っていたい歌っていたい
眠る前目覚めぬことを祈る日々終わりにしたい涙ひとつぶ

次悪の道に生まれたミューズ

宮嶋いつく

極貧の家庭 売春宿 エイズ 運命^{さだめ}であれば受け入れるのか
最善でなくとも選択肢が変わる次悪の道に生まれた美女^{ミューズ}神
美談にはあらず救済にはあらず利害一致が生み出した道
美しい少女を美しく切り取る写真家の誠実なまなざし
搾り取るのではないよう配慮してサステナブルなモードの消費
貧困を抜けて教育受けられる己が身体で開いた未来
最善の方策は能書きに終わる 裁く権利が誰にあるうか
幸せであれよと望む我が脳に刻まれた伝説の美少女

ピアノだつて空を飛ぶ

村田一広

寂しくて立ちどまる人がゐるけれど踏切にはもう電車も来ない
ピアノだつて空を飛ぶ三階の音楽室まで鉄索に吊られ
帰り路の橋長すぎて渡り切る頃にはいつだつて真つ暗に
富士山は毎日見てる海はもう何年も見てゐない富士の麓
浮き雲が浮力失ひビルの屋上から手を伸ばせば届く
豪華なる二段のケーキ誕生日のネットからあまた拾つて祝ふ
挟まれたコロッケが逃げないやうにバターが抱きとめてゐるコッペパン
真夏でもふかふかの真綿いつばいの空から雨(飴)らしきもの落つ

晩夏スケッチ

森内詩紋

この橋の先はあなたの住む街でぼくの町より風がゆるやか
晩夏^{おそなつ}の終わりをぬるく潤してため息のごと霧雨がふる
百日紅^{サルスベリ}、木槿^{ムズナギサ}、アペリア花の名を覚えるいつかきかれるために
新しい道をあなたのナビで行く遠回りでも安心がある
やなヒトに見つかっちゃって外に出る愛想笑いを二人分置き
トルソーを抱えて運ぶ指先の色にひと粒ふた粒と雨
何事もそつなくこなすあなたでもお好み焼きが返せないとは
どんな日も二度とこない日それならばどうかあなたが笑えるように

クストツと笑える八葉集

若山かん菜

数学の用語で韻を踏みなさい微積分分セブンイレブン
毒舌の集いに添えるビッグパフェ舌の動きは更に滑らか
縁側の領有権を主張する子猫に論破されてしまった
新しい塔ができると足音が聞こえてくるよきつとゴジラだ
「伝統の白いタイツを廃止せよ」王子が叫ぶ革命前夜
「久しぶり」いとはとこと再会し昔話が盛り上がる通夜
「このキャベツ美味い」と言つたあなたには「それはレタス」と言えなかったわ
ケチャップの賞味期限が明日までオムライスには歪なハート

帰省

ルオ

恒例の南下ですつてXでだけ報告し新幹線へ
車窓越し祖父の峠の時も見た富士の青さが今日は優しい
弟は暮れの帰省でいらしく久方ぶりの『一人娘』だ
抱く子なく指環すらなく元気だと笑うばかりの長女でごめん
夕飯が好物ばかりと思つたら私をだしに酒を飲む父
読み終えたSFを母に貸す代わりに上着を借りて朝の散歩に
祖母と会い途端こぼれる方言に時計の鳩が柔らかく鳴く
北上し親に着いたと電話かけDiscordにて紡ぐ「ただいま！」



夕風に咲く風媒花まなざしも耳も真つ赤に焼ける二人は
秒針に緩く重なり合うようで父の呼吸が伸びていく夕
3年前。8月27日の18時21分の空

夕方の商店街は飛ぶよりも歩いたほうが楽しめるはず

どうしても許せないこと 放課後の夕焼けぐらいずるくなりたい

シロナガスクジラを追って入り江まで迷いこんだの晩夏の夕焼け

夕風が泣いてばかりの姫に問う 頷く月夜ムーンロードを

デコボンの出っ張りに似た憂鬱をみじん切りする落日の窓

日の入りてしばし残れる夕映えの、思ひは狂ほしいほど燃えて

早送りされてく夕に揺れている浴衣の裾にはアンクレット

朝食と夕食作る晩年のバイトは時給1015円

夕焼けが誰かの帰る合図なら帰れぬ私は影踏み遊ぶ

夕焼けを翼に背負^{しょ}って少しずつ高度を下げる今日もおかえり

カーカーと鳴る夕がらす友達は砂を払って僕はまだまだ

きみのいないリビングにいて夕立ちは過ぎ去ってからより匂いたつ

夕立ちはふたりを隠す世界からまだ雨音がこえた頃

◆ 麻倉ゆえ

◆ 域

◆ 井倉りつ

◆ 宇祖田都子

◆ 泳二

◆ 小野小乃々

◆ 織部ゆい

◆ 柿崎薫

◆ 歌島孟

◆ 片羽雲雀

◆ 廻れ井戸

◆ キキキキキウ

◆ 氷乃銀猫

◆ キム・ジュンウ

◆ 西鎮

◆ 白川楼瑠

橙に空が染まった帰り道ヒグラシの歌どこか切なく

吐き棄てられた言葉の溜まるゆふぐれは電信柱を迂回してゆく

書き留めるやさしいノート 夕方にひさしぶりって降る雨のこと

夕焼けをポケットにしまう帰り道明日のことはまだ話さない

夕立にあらわれる空きみのタオル握りしめ言う「あした返すね」

かなしみも浸みて落ちつく夕映えのネクタイ七三ふっくら中也

安らかに 黙祷みたいに夕暮れは濡れた緋色の道を畳んだ

伸び枝は空を刺すよう凛々しくて端から赤のやおら滲みき

花びらを追いかけるよな日々だった君の知らない秋の夕暮れ

夕の陽に誘われゆく波をわけ さいごはせめて優しいうそを

くねりゆく電車の窓に夕暮れは部活の後の眠りの流れ

いにしえのドライブマップ助手席のきみと探した未踏の夕陽

祈るよにつり草にぎる夕映えの信号待ちの交差点

夕方のチャイム「またね」と呪ったの 効き目切れたら死んじゃうからね

夕べから一夜の恋へ流川飲めないのにねあゝから涙

終わっちゃうから夏休みあるんじゃないんだーナツの穴八月の暮れ

◆ 須藤純貴

◆ tonkalife

◆ 千原こはぎ

◆ 低体温℃

◆ ののもづかさ

◆ 中村成志

◆ 七澤銀河

◆ 埜中なの

◆ 畑 依裕

◆ はづきもに

◆ 廣珍堂

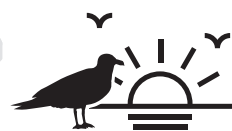
◆ 福山桃歌

◆ 古井 朔

◆ Mawaru.

◆ 水野英明

◆ 南の島



焼けている稜線はもう遠いけど手をつないでく明日へあるく
輝きの増すほどさびしい夕暮れにただぼんやりとたたずんでいる
白猫が桃猫となる夕焼の只中に大きく伸びをして
夕風に啼く虫不意に黙る虫本音は決して君に言えない
夕焼けは優しい赤だ 誰よりも優しいきみが言うならそうだ
地球上たったひとりになった日に見る夕焼けは重い緞帳

- ◆ 水也
- ◆ 宮嶋いつく
- ◆ 村田一広
- ◆ 森内詩紋
- ◆ ルオ
- ◆ 若山かん菜

一首評

そらよみ



前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

一首評

歌島孟

目から水 水のおちる音 あの人が好き
だった色の傘をさがして

井倉りつ

抽象的タイトルが、最終首で渋谷駅へと収束し、くつきりとした像を作り出しました。従来の忠犬というイメージを抜け出して、情愛に生きる、けなげな愛犬の姿へ描き直したところが印象的です。選んだ一首は、好きな色を探そうとする一途さと、それが見当たらない喪失感の、入り混じった心情が上手く表現されていて好きな歌です。あの人を探すのでなく、付随する傘の色を探そうとする所が、さながら能『班女』のようで魅惑的でした。

一首評

七澤銀河

隧道を語るあなたの内側に不意にひらける湖がある

高野蒔

冒頭の「隧道」から最後に一気に景色が開け、詠み手は「湖」へと読者を連れて行く。そこはかとなく光を感じさせる「湖」は先行きの不透明な現在からその先の未来を暗示し、光と影の濃淡を響かせながら現在の「陰」を浮き彫りにさせて行く時間の描写が美しい。

連作「夏至のゆうれい」全体の描写勿論、その中に一首強烈な陰を刻印することで連作全体の印象を揺らがぬものへ昇華させている。

あの星は生まれたばかりの星だからまだ
まだこれから苦しいだろう

坂口栞

星は、ガス星雲の圧縮から誕生する。生まれたばかりの状態は、成人（？）よりも何千倍も巨大であり、人間から見ればちよつと感情移入しにくくはある。しかし圧迫・凝縮・固形化・発熱等の過程とそれに伴うだろう様々な事案は、文字通り苦難の道程だろう。主人公は、寄り添いたい対象へ、精一杯身近に、しかしあくまで他人事として心配を投げかけている。「星」「生」「苦」のみを散らばせた漢字が、広大な宇宙を思わせる。

一首評

中村成志

ミサイルがミサイルを抱く瞬間をぼくらは空に見るのだろうか

砂山ふうり

「抱く」に注目しました。例えばこれが撃つ、だと現実の地对空誘導弾システムの迎撃が想起されます。パトリオットです。

抱く、だと幻想的なイメージの方が優先されます。滑らかでキラキラと光る肌を持つミサイルが飛翔して上空で正面から抱き合う。その心象は平和の希求でしょうか。終末の予感でしょうか。

鮮烈な印象を残す1首です。

一首評

寿司村マイク

雨音に負けるくらいの声で言う最後のこ
とばは聞かなくていい

千原こはぎ

雨音には勝っても負けてもいいものである。この歌を拝読したのと近い時期に俵万智さんの歌「にわか雨よりも激しき音たてて空心菜を炒めておりぬ」(『未来のサイズ』角川書店2020)を目にし、冒頭のように思い至った。

あえて雨音に負けるくらいの声で伝える思い。「聞かなくていい」と「言わなくていい」は全然違う。わたしも雨の日に、わたしだけが気づいた思いを伝えてみたい。雨音に勝つか負けるかは天に任せて。

一首評

南の島

風呂洗うだけで疲れるようになりそれでも
も旅に出たいと思う

南の島

〈君〉との初夏の一時が詠われた一連の六首目。それなりに人生経験を積んだ二人の、盛り上がった時々平坦だったりする日々の中、最も平坦な場所とそこから見ている未来とが詠われていると読んだ。思えば人生は一つの旅だ。風呂を洗っても疲れる年齢になり、それでも旅に出たい、そして人を愛していたい。ストレートだが深みのある心象を「風呂洗う」というやや舌足らずな詠い出しから成立させる構成が、リアルで心地よい。

一首評

西鎮

パスワード2度まちがえて残された1度
を生きるまちがわぬよう

みはらひたき

連作タイトルの「U-21A9」は「う」のユニコードらしく、戻れるものなら戻りたいという本音が透ける。3首目のこの歌は後戻りのできなさに加えて、「既に2度間違えている」という主体の弱気が前面に表れており、その逼迫感が深刻ながらもおもしろい。間違えてもヒントも得られず正答を求められる、パスワード入力のハードモードが人生と重なる。不可逆だからこそ、この人生のヒントはこの人生で見つけていくしかない。

一首評

北谷雪

生きていくことを怖がるのはやめて海す
れすれの星を捉えた

麻倉ゆえ

生き続けていくことを怖がるのを辞めてから、まずはじめにしたことが星を捉えることであつたという「捉えた」が、目で追ったのか手で捕まえたのかは定かではないが、どちらでも素敵。「海すれすれの星」は、水平線に沈む際の星だろう。消えようとする星を「捉え」、生にしがみつこうとしている。海と自分と星、静かな決意の歌だ。三句で切れるまで勢よく読ませるところにも決意が見えるよう。

一首評

埜中なの

望遠鏡

34



書き手

永井文鳥

テーマ

桜の可能性は

わたしが短歌をはじめたきっかけは、笹井宏之のこの歌を読んだことでした。

「はなびら」と点字をなぞる ああ、これは桜の可能性が大きい
／笹井宏之

以来、短歌と桜の関係性について考えることがよくあります。桜を詠んだ短歌を読むと、つい嬉しくなります。

マルボ口をふかせる君に肺といふ逆さの桜いま咲きほこる
／藪内亮輔

この歌を見て、普段吸わないタバコを買いに

走ったこともよく思い出します。

一方、桜を自分で詠み込もうとするのは難しいです。歌会では「桜の短歌はもうやりつくされている感じがあって難しい」という話を聞いたこともあります。水原紫苑氏には『桜は本当に美しいのか：欲望が生んだ文化装置』（平凡社、二〇一四）として、万葉集以降の桜歌を精緻に分析した著書もあります。現代短歌をやっている中で、意識する／しないにかかわらず古典の和歌の文脈を引き込むことがあります、こと桜に関しては、その傾向が大きいように思います。

桜のことを詠んだ和歌は万葉集からすでに見られ、現代で桜の歌を詠もうとするとどうしても、その歴史的蓄積を感じざるを得ません。我々はもう桜を詠むことができないのか、詠めるとして、どう桜を詠むことができるのか。今回のコラムでは、万葉集と古今和歌集の桜歌を頼りに、現代短歌における「桜の可能性」について、やや季節外れですが、思いをはせてみたいと思います。

桜の和歌とよく対照されるのが梅の和歌です。万葉集においては、桜の歌が約四〇首収録されているのに対して、梅の歌は約一一〇首あり、桜よりも梅に文学的関心が寄せられていたことがうかがえます。これが古今和歌集になると、桜の歌が（数え方によりますが）約五〇首、梅の歌が約二〇首と、その関係が逆転します。万葉集の編纂された時期（奈良時代末期）と、古

今和歌集が編纂された時期（平安時代前期）との間で、桜に関する何らかの文学的意識の変化があったことが示唆されます。ちなみにこのころの「桜」は、現代で花見の対象となるソメイヨシノではなく、山の上に一本で佇む「山桜」のことだとされます。

そこで、「桜」に対する美意識がどう変わったかという点に注目して、万葉集と古今和歌集の桜歌について見てみたいと思います。万葉集と古今和歌集の桜歌の違いとして、「散る桜を美しいと思う価値観は万葉集にはなく、古今和歌集において出てきたものである」などと説明されました（有岡、二〇〇七）。

ただ、万葉集にも散る桜に美しさを見出しているように考えられる歌は出てきます。

雉鳴く高円の辺に桜花散りて流らふ見る人もが
／作者不詳
（万葉集卷十・春雑歌・花を詠む・一八六六）
阿保山の桜の花は今日もかも散り乱らむ見る人なしに
／作者不詳
（万葉集卷十・春雑歌・花を詠む・一八六七）

どちらにも共通するのは、「見る人もが（誰か一緒に見る人があればよいのに）」・「見る人なしに（見る人もないままに）」というように、「見る人」の存在によつて、桜が散っていく様子に価値があることを示すような詠み方がなされているということだ。

古今和歌集では、散る桜の美について、次の

ような歌で描写されています。

残りなくちるそめでたき桜花有りて世の中はての憂ければ
／作者不詳
（古今和歌集卷二・春歌下・七一）

東宮の雅院にて桜の花のみかは水にちりてながれけるを見てよめる
／菅野高世
枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ
（古今和歌集卷二・春歌下・八二）

万葉集との違いは、「世の中のもの最後がつかいものだから」桜が散る姿は潔くてすばらしい」というような価値判断を明示してみたり、桜の花びらが散つて水に流れる様子を「泡」にたとえてみたりと、桜が散ることを美しいと思う価値判断が前面に出ているという点にあるかと思えます。

このように見てみると、古今和歌集では桜そのものの美しさについて、細かく描写した歌や、比喩を用いて説明した歌が多いように思います。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた
み吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける
／紀友則
（古今和歌集卷一・春歌上・六〇）

春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはり行く
／作者不詳
（古今和歌集卷二・春歌下・六九）

桜の花を「雪」に見立てる手法は古今和歌集には複数首見られますが、万葉集にはありません。六九番歌は、桜の花の色の何らかの変化を観察し、桜が散ることを予感するものです。

山峽に咲ける桜をただ一目君に見せては何をか思はむ
／大伴池主
桜花今ぞ盛りと人は言へど我れは寂しも君としあらねば
（万葉集卷十七・三九六七）
／作者不詳
（万葉集卷十八・四〇七四）

花を見る行為を詠む歌は古今和歌集にもみられるものですが、万葉集では「見る」ことそのものに対する価値の強さを感じます。引いてきた二首は、「桜をあなたに見せたい」「あなたと一緒に桜を見れないのでわびしい」と、一緒に見る人の存在を強く要請しているような詠み方です。

ここまでのことをふりかえると、万葉集の桜歌は「桜を見る人」の存在が重要であり、それが古今和歌集に至って「桜の花そのもの」の美に意識が向くようになった、と説明できそうです。万葉集と古今和歌集のどちらが優れている、と論じるつもりはありませんが、桜の花に文学的関心が持たれるにしたがつて、桜の花そのものの描写に、当時の歌人たちが苦心するようになったということは指摘できそうです。

万葉集と古今和歌集の、このような態度の違い

いに、現代短歌における「桜の可能性」をわたしは感じます。「桜」というモチーフを、現代ならではの方法で描写することによつて、この「桜」という巨人と対峙することができているのではないかと思えます。冒頭にあげた現代の二首も、「点字」や「マルボロ」という、おおむね近代以降に確立した要素を用いることによつて、桜の美意識を現代に引き受けています。古代から連綿と続く桜歌の歴史において、なかなか新規性を生みづらい表現があることも確かでしょうが、だからこそ、現代人の現代的感覚に根差した桜の表現を探っていけば、新たな桜の表現が見えてくるのではないかと思えます。

もう少し範囲を広げると、万葉集と古今和歌集の桜歌の態度は、いわば「価値あるとされているもの」への視線と、「自分が価値あると思うもの」への視線との違いといえるものとの違いに似たものを感じます。自分自身がよいと思つたものを、自分自身の価値観においてよく観察し、感情を載せていくこと。このような視線を持つことが、自分自身にとつての「価値」を短歌に落とし込んでいくことの基本であると改めて認識させられます。短歌において、いわゆる「スケッチ」というか、対象を精緻にことばで描写するということか、そのような描写の重要性が語られることがあります、桜歌の変化の様子を観察すると、より一層、スケッチの重要性が見えてくるのではないかと思えてなりません。

このような点において、桜の可能性は、現代でも「大きい」といえるのかなと考えています。

感想は
こちらまで!

Twitter(現X) ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter(現X) での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

短歌募集

くわしくは
こちらから



2026. 35 26 10/31(土) 24時

8首の
連作

テーマ詠
「静」1首

一首評
「そらよみ」

2026. 36 26 12/31(木) 24時

8首の
連作

テーマ詠
「淡」1首

一首評
「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください

<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集鳥 千原こはぎ

暦の上では秋となりましたが、まだまだ暑い日が続いています。夏の疲れも出やすい頃ですのでお身体に気をつけてお過ごしください。わたしは最近とても忙しく、気づいたら8月が一瞬で終わっていました。9月はもう少しのんびり過ごしたいです。さて、今号もたくさんの方の素敵な歌をお寄せいただき、ありがとうございました。テーマ詠のお題は「夕」。夕暮れの空や光夏の終わりの気配など、すてきな歌が集まりました。どうかお楽しみいただけますと幸いです。次号の〆切は10月末、発行は11月初旬です。テーマ詠のお題は「静」。皆さまのご投稿を心よりお待ちしております。

今号の
うたそら

2026.
September

34

参加歌人様

48名

連作欄 33名

テーマ詠欄 38名

一首評 8名

リレーコラム
望遠鏡

永井文鳥 さん

リレーエッセイ
いちいちえ

模糊 さん

ご寄稿いただき
ありがとうございました!

編集後記



喧騒もわたしに宛てたまなざしもいつかまとめて耳をすますよ

模糊



34

リレーエッセイ

いちいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

聞こえる

書き手

模糊

幸運なことに、わたしには(得意不得意はあれど)、不自由なく生活していけるだけの機能が十分に備わっている。

最近、わたしたち、というかわたしは五感のひとつをすずんで手放している。朝家をでて、家に帰るまで、授業を除いた時間ずうっと耳にはイヤホンが突っ込まれている。批判がしたいわけではない、事実なのである。あがり症で、環境の変化だとか、知らない人間がどうにも苦手なわたしにとってはお守りのようなもので、世間的に見てもわたしのイヤホン使用時間

はあまりに長すぎるけれど、目を瞑ってほしい。好きな音楽をかけて、ノイズキャンセリングまで効かせると、まわりの音はほぼきこえない。それがこちよくて、よく微睡んでいる。このことに特に疑問も違和感もなく過ごしていた。通学電車のことだった。目的地まであと一駅というところで、目の前のおばあさんがっこりわらって口のかたちを変えていた。座っていたボックス席にはわたし以外に誰もおらず、おばあさんが話しかけているのはわたしだ、とわかった。ころんとしたイヤホンを耳から抜く。片手でそれを握りしめる。あわててもう一度言ってもらえるかと尋ねた。そのおばあさんというのは、相当なおばあさんで、わたしが聞くことに一所懸命になつてようやくききとれた。「頬、かわいいねえ」

言われたことが分かってから、本当にわかるまでちよつと時間がかかった。朝の殺伐とした電車内でわたし個人を褒めてもらえるなんて、思ってもみなかったことだった。彼女はうちの孫もそうやってお化粧するの、いいねえ、と言ってやはりにっこり笑った。わたしがどうにかし

て伝えられるだけの感謝を彼女に伝えてすぐ、駅への到着を知らせるアナウンスが鳴った。いつもよりよく聞こえた。大学に入学してから4ヶ月ほど経つ。この件を含めて3回ほど、通学中に話しかけてもらえることがあった。いつでもわたしは耳にイヤホンを突っ込んでいるから、いずれの場面でもだいたい一言目をとりこぼしている。人がひしめく金属の箱で、わざわざ人に話しかけるなんて滅多なことなのに。話しかけてくれた彼ら、彼女らにとってはなんてことのないことであっても、わたしにとっては大好きな人に話したくないくらい宝物であるから。人と言葉を交わしたあとは、ほこほこした気持ちで窓の外、景色の奥なんかを見つめたりしてしまう。

わたしはいまだに都会の喧騒に慣れず、人いから逃げたくてずっと耳を塞いでいるけれど、わたしの見つけた言葉くらいは聞こえていたいと思う。



うたそら 第34号

発行：2026.09.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>